

信州人の人間関係の PAC 分析

内 藤 哲 雄

明治学院大学国際平和研究所 研究員

(信州大学名誉教授 博士(人間科学) 早稲田大学)

(初出：信州大学人文学部特定研究 研究班 最終報告書 1995 年 3 月 Pp.5-26. なお、本研究の実施後に、長野県山口村と馬込村が岐阜県に合併したが、本論の全体的結果には影響がないので、元のままとした。)

はじめに

日本の国土は面積がそれほど広くないにもかかわらず、南北に細長く伸びており、山や谷や海岸で地理的に区切られ、地域間で気候風土に著しい違いがみられる。このため、それぞれの盆地や平野、海岸線や山間部を中心とした、独自の政治的・経済的・文化的境界が存在してきた。これに加えて、長い間の徳川政権下での鎖国政策のなかで、各藩の人々に独自の「藩民性」が形成されてきたことが知られている。

上述のような背景から、人間関係のあり方にも、地方や県によって著しい違いのあることが指摘されてきた。それらの中でとりわけ注目されているのが、「信州における人間関係」の特徴である。祖父江(1980)は、人間関係の地方性として、「北海道」「東北」「関東」「北陸」「中部」「近畿」「中国」「四国」「九州」「沖縄」に分割して特徴を記しているが、中部地方については最も特色あるものとして長野県のみを取り上げている。少し長いですが、以下に転載してみよう。(南 博編『日本人の人間関係事典』, p307-308.)

中部地方の中で人間関係に最も特色あるのは長野である。長野といえば昔から教育県といわれ、この人々は「理くつばい」「議論好き」「理論的」等々…といわれてきたが、こうした指摘は明らかにあっている。まずここでは明治初年に小学校への就学率が全国最高であったのだが、こうした点にも明らかに関連して、いわば「オレが…オレが…」という自己主張は他県にくらべて非常に強い。そしてよその県なら後輩たちがすぐ先輩をたよったり、同じ県から政治家が立候補すれば全県をあげて応援しがちなのだが、ここだけはこうしたことをいさぎよしとせず、各自が強く独立を重んじている。したがって今までにあげてきた人間関係の二つの型(「相互依存型」「相互互助型»)に対して)長野県人の場合は<相互独立型>とも呼ぶうるといってよいだろう。日本の大部分の場所における人間関係は、北陸のところで述べた<相互互助型>なのであり、これに少数の<相互依存型>が加わるのに対し、長野などは例外的に、<相互独立型>なのである。

たしかに古くからよくいわれていたことばに、「薩摩(あるいは肥後)の大ちょうちん、信濃の腰ちょ

うちん」というのがある。「薩摩や肥後の人々は先輩が一人先頭に立って大きなちようちんをもって歩くと、他の者があとからそれについてゾロゾロ歩いていくのに対し、信濃の者はめいめいが腰にちようちんをつけて、各自、勝手な方向へ歩いていく」という意味で。「大ちようちん」的傾向は薩摩や肥後のみならず、日本全国どこでも多かれ少なかれみられることだと思われるが、それとくらべたとき、長野県人は特色あるものとして考えられてきたものであろう。

なお東京における長野の県人会をみれば、これも在京の県人会中では最も活発な部類に属し、とくに毎号四〇〇字三〇〇枚の内容をもつ月刊誌を出しているのはここだけであるが、しかし全県ひとつにまとまりにくくて数十の地域分科会に分かれ、県人会の名称もここだけは「長野県県人会連合会」と称している。また県人が政治に立候補しても県人会としてはいっこうに支援することがない。この点は先にもふれたところであるが、新潟県人会などは明らかに対照的だといってよいだろう。

ところで、現在の長野県では高速道路などの高速交通網が着々と拡張されている。これによって県内広域での移動が容易となり、その時間も短縮され続けている。首都圏の東京や中部地方の中心である名古屋へのアクセスとなる、鉄道や高速バスの乗車時間も飛躍的に短縮されてきている。また、かつて教育県といわれてきた長野県ではあるが、全国にくらべて学力水準の低迷、不登校率の高さが問題とされるようになってきている。さらにマスメディアでは、首都圏の情報や国際的な情報を流し続けている。こうした社会環境の変化は、県民意識や人間関係の様式にも、何らかの変容をもたらしているのではないかと考えられる。そしてこれらの変化の影響は、新たな動向を敏感に反映する若者たちの意識構造にいち早く現れると考えられる。しかし他方では、長い間にわたって継続された文化や伝統が、地域で生まれ生活する地元の若者たちに継承され、地域（人間関係）ステレオタイプとして意識下深くに潜在しているとも考えられる。そして現実の地域生活者の意識や潜在意識の構造がいかなるものであるにせよ、それらは彼らの具体的な対人行動を通じて彼らと交流する他県出身者によっても、やがて「信州人の人間関係」についてのイメージ構造が形成されることになるであろう。また、信州人にとっては、他府県の人と交流することによって信州人の人間関係のイメージが明確化されることになるであろう。

そこで昨年度に実施・報告された「内陸地域「信州」のイメージの構造分析」(内藤, 1994a)に続く本研究では、他県出身者と長野県出身者がともに交流する機会の多い信州大学の学生を対象として、「信州人の人間関係」のイメージについて実験的に探索を試みようとするものである。なお、対象者個々人のイメージの内面深くの構造を探る方法として、昨年度の研究と同様に、内藤によって開発された個人別態度構造分析(PAC分析)の技法を採用した。これは、当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、当該個人によるクラスター構造の解釈を通じて、個人別に態度構造(personal attitude construct: PAC)を分析する方法である。この技法によって、日常的には意識化されることのない「信州人としての」あるいはまた「信州人による」対人行動の深層構造が解明されると考えられる。

具体的に検討する内容は、若者に出現する信州人の人間関係のイメージ構造が、現在でも租父江によって記述されたものと同じものであるのか、県外出身者や長野県出身者で個人別にどのような差異が見られるかという点である。これらの課題を、個々人のイメージ構造を詳細に吟味する PAC 分析の技法によって明らかにすることが、本研究の目的である。

方 法

被験者 信州大学の学部学生で、他県出身者 5 名（女子 3 名、男子 2 名）、長野県出身者（中信地区 2 名、南信地区 1 名、北信地区 1 名）で県内のみの居住経験者 4 名（女子 2 名、男子 2 名）の合計 9 名。いずれも現在松本市あるいはその近郊に居住する者である。

実験時期と実施形態 実験は、1994 年 12 月上旬から下旬にかけて、すべてが個人別に実施された。

手続き まずはじめに、「『信州人の人間関係』の特徴やイメージを思い浮かべてください。そして、思いついた順番とともにカードに記入してください。」と教示した。このあと、今度は肯定か否定かの方向に拘わりなく重要と感じられる順にカードをならべ換えさせた。ついで項目間の類似度距離行列を作成するために、ランダムに全ての対を選びながら、以下の教示と 7 段階の評定尺度に基づいて類似度を評定させた。

教示と評定尺度 教示は、下記の〈教示と評定尺度〉が印刷された用紙を被験者に提示したまま、「 」の部分の部分を口頭でゆったりと読み上げることでなされた。

「あなたが、信州人の人間関係の特徴としてあげた特徴やイメージの組み合わせが、言葉の意味ではなく、直感的イメージの上でどの程度似ているかを判断し、その近さの程度を下記の尺度の該当する記号で応えてください。

- 非常に近い……………A
- かなり近い……………B
- いくぶんか近い……………C
- どちらともいえない……………D
- いくぶんか遠い……………E
- かなり遠い……………F
- 非常に遠い……………G

クラスター分析及び被験者による解釈方法 上記の類似度評定のうち、同じ項目の組み合わせは 0、A は 1、B は 2、C は 3 というように、0 点から 7 点までの得点を与えることで作成された類似度距離行列に基づき、被験者ごとにウォード法でクラスター分析した。ついで析出されたデンドログラムの余白部分に連想項目の内容を記入し (Figure 1 参照)。これをコピーして 1 部は被験者がもう 1 部は実験者がみながら、以下の手順で被験者の解釈や新たに生じたイメージについて質問した。まず、実験者がまとまりをもつクラスターとして解釈できそうな群ごとに上から各項目を読みあげ、項目群全体に共通するイメージやそ

それぞれの項目が併合された理由として考えられるもの、群全体が意味する内容の解釈について質問した。これを繰り返して全ての群が終了した後、各群間の関係や全体についてのイメージや解釈を質問した。これが完了すると、実験者として解釈しにくい個々の項目をとりあげて、個別のイメージや併合された理由について補足的に質問した。最後に、各連想項目単独でのイメージがプラス、マイナス、どちらともいえない(0)のいずれに該当するかを回答させた(Figure 1の項目内容の後ろに付加された()内の符号を参照、Figure 2以降も同様)。

結果と考察

各被験者の連想項目及びデンドログラムは、Figure 1からFigure 9のようになった。連想項目数は7から15までと多様である。内容に関しては、仲間集団内での人間関係の親密さを示す回答などの共通点もあるが、細かい部分ではかなりの違いがみられるようである。まずはじめに各被験者の反応の構造を個別に吟味してから、全体としての共通点や差異点を検討することにしたい。なお、クラスターの数の決定に関しては、内藤(1993b, 1994a, 1994b)と同じくまず実験者の試案的なクラスター構造の解釈を腹案とし、各クラスターの項目を上から順に読みあげ、それらへの被験者自身のイメージや解釈を報告させる。そして被験者によるクラスターのまとまりが実験者と異なって分割されたり併合される場合には、被験者のイメージに沿って群の数を併合し、総合的に解釈する方法を採用した。

1. 県外出身者の事例について

ここでは長野県と同様な地方出身者と大都市圏での生活体験者、祖父江の研究で長野県と対置された熊本県(肥後)出身者の5つの事例を取り上げる

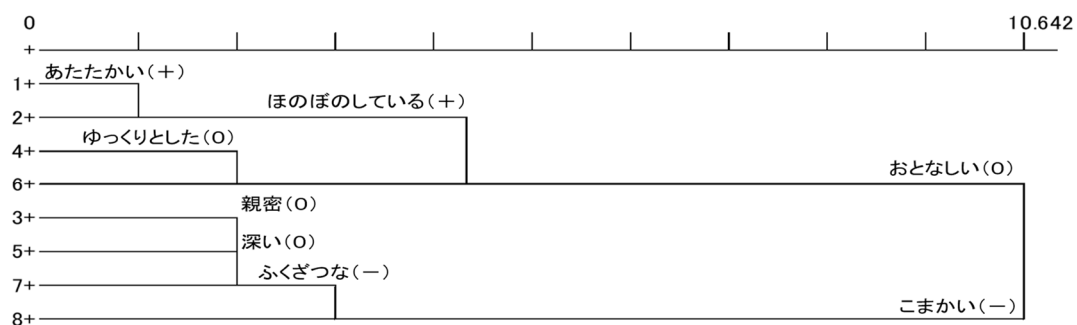


Figure 1. 女子 A「山梨県韮崎市出身：学部 2 年生」のデンドログラム
(左の番号は項目の重要順位、上部の数値は距離を示す)

被験者 A の事例 被験者 A は、長野県に隣接する山梨県韮崎市出身の学部 2 年生の女子。クラスター分析の結果は Figure 1 に示されている。連想項目のほぼ 3 分の 1 にあたる重要順位 3 位までをみると、①あたたかい、②ほのぼのしている、③親密、となっている。これらの項目からは信州人の人間関係があたたかく、好意的なものとして感じられていることが窺える。しかし、連想項目全体をみると、プラスとマイナスがいずれも 2 項目で、どちらともいえないの (0) が 4 項目であることから、肯定的イメージは弱いものであると考えられる。

<被験者 A によるクラスターの解釈>

クラスター 1 は「あたたかい」～「おとなしい」までの 4 項目：これらの項目からどんなイメージが浮かんでくるか、どのような内容でまとまっていると思うかを質問した。これに対して「どんなイメージ？ うーん、……。『ほのぼのしている』というの、大体あとの 3 つが含まれていると考えたんですけど。うーん、……。え……。あとどう答えればいいんですか？ なんか、人間の対人の接触がとげとげしくないというか、まるい感じ。そんな感じがした。」と回答した。

クラスター 2 は「親密」～「こまかい」までの 4 項目：クラスター 2 については、「イメージは、……。うーん、……。なんか、……。なんだろう。一人一人の付き合いが深くてなんか、めんどくさい感じとか、あと、あとは一、……。なんでこういうのが出てきたのかというのは、人間関係は何かさっぱりしていない。しつこいというのではないんですけど、何かそんな感じ。他には……。うーん、……。親身だったり、複雑な、こまかいというので、なんかわずらわしい、鬱陶しいと感じることもあるんじゃないかという気がします。そんなとこです。」となった。

(クラスター間の比較)

クラスター間を比較させると、「えーと、『あたたかい』というのと、『親密』な『深い』というのは共通するところがあるという気がするし、人間関係のテンポがどちらのグループもゆっくりしているイメージがあって、あって、あと……。うーん、……。『おとなしい』とか「こまかい」というのは、何か共通している。あと『ふくぎつな』というのは共通していない気がするが、『おとなしい』と『ゆったりした』イメージの中に、『ふくぎつな』(が)、来ないという気がする(る)。表面的に(は)『あたたかい』などの上のグループ(クラスター 1)があるが、親しくなると下(「クラスター 2」)のようなイメージがする。」となった。

(補足質問)

おとなしい：おとなしいというのは、何か消極的で、受け身な感じとか、やさしいというイメージもあるけど、ちょっと離れて考えると、自己中心的、自分中心の考え方、人のことを考えない。そんなとこです。

深い：深いついていうのは、えーと、いい意味で取ると何か、何て？、えーと、相手のこととかをよく知っていて、ほんとに相手も自分もお互いを理解していて、何でも相談していい付き合いができるという意味にもとれるし、逆に人は人の詳しいところで知りたがる、深入り

したがるイメージを持つし、両方。

ふくぎつな：こう何か、人間関係が入り組んでいて、うーん、……。何か別に付き合い、人間関係を持ちたくない人も、人間関係で、自分の気持ちとは逆にしたり、人間関係があらに向いているイメージ。

こまかい：ふくぎつなけっこう似た感じ（で）書いたんですけど、ささいなことに敏感、小さなことにも根に持つ、考え方が大ざっぱじゃない感じ。これはそれくらい。

（信州の人との付き合い、出身地との比較）

信州の人は、サークル、バイト先にもいる。バイト先に長野の県の人が多く、あとはサークルの人。親しく付き合うのはそれくらい。（出身地の蕪崎市は）都会でも田舎でもない。住んでるところは、信州とたいして違わない。途中で蕪崎に引っ越してきた。母は蕪崎が地元。行事がめんどくさい、昔ながらの。

<被験者 A についての総合的解釈>

クラスター1 は、「おとなしい」がやさしさだけでなく自己中心的な要素をもつことが感じられているが、表面的な付き合いの段階では、「あたたかく」「ほのぼのとしている」し、「ゆっくりとした」ものとして受けとめられている。このクラスターではプラスとどちらともいえない (0) の項目のみであり、好意的な内容から構成されているといえよう。<ほのぼのとした受容的關係>を示すクラスターであると解釈できよう。

クラスター2 は、「親密」になると、お互いの内面「深い」ところにまで介入しようとするようになり、マイナス面である「ふくぎつな」人間関係に目を向け、「こまかい」配慮を要求されることを感じていることを示唆している。<ふくぎつな人間関係への配慮を要する深い付き合い>のクラスターであると命名することができよう。

被験者 A においては、長野県を出身地と類似した地域と感じ、表面的な段階での受容的な人間関係を好意的に受けとめるが、親密になると複雑な関係への配慮を要求されるというあり方には非好意的な感情を懐いていると読み取ることができる。

被験者 B の事例 被験者 B は、茨城県東海村出身の学部 3 年生の女子で、大学入学依頼の 2 年 9 カ月を中信地区松本で居住している。

クラスター分析の結果は、Figure 2 のようになった。連想項目の 3 分の 1 にあたる重要順位 4 位までをピックアップすると、①素朴な、②温かい、③言葉はいらない付き合い、④地元意識の強い、となっている。項目単独でのイメージは、第 3 位まではいずれもプラスで、第 4 位のみがどちらともいえない (0) である。お互いによく知り合った素朴であたたかい人間関係を感じられる傾向を示すものである。連想項目全体を見ても、12 項目のうち 2 項目のみがどちらともいえない (0) で、残りはすべてプラスである。信州人の人間関係を非常に好意的に受とめているといえる。

<被験者 B によるクラスターの解釈>

クラスター1 は、「素朴な」～「笑ってごまかさない」までの 5 項目：「えーと、付き合いが深くなればなるほど妥協を許さないというか、いい加減なことを許さない。だいたいそん

な感じでまとめていると思います。うーん、白は白、黒は黒という感じで、あいまいな態度を許さない。そういうある意味で単純です。悪くいうと臨機応変に欠けるというか。あとはとくにありません。

クラスター2は、「言葉はいらないつき合い」～「温かい」までの5項目：このクラスターのイメージは、「誰とでも、そこであっただけの人とでも一緒になって話せる。部外者でも比較的受け入れられやすい、温かい雰囲気があると思います。一対一の付き合いというよりは、集団のなかの付き合い。ほんとに一対一の付き合いじゃなくて、みんなで和気あいあいとやっているイメージがあります。(他には) 特にありません。」となった。

クラスター3は、「地元意識の強い」と「団結力がある」の2項目：ここでのイメージは、「部外者を拒むという訳ではないんですけど、なんか地元意識がすごく強くて、外の人を受け入れても内部の人とは厳として違うというイメージがある。あとは地域社会のつながりとか、家の、家族の団結、そういうものが強い気がします。あとは特にありません。」となった。

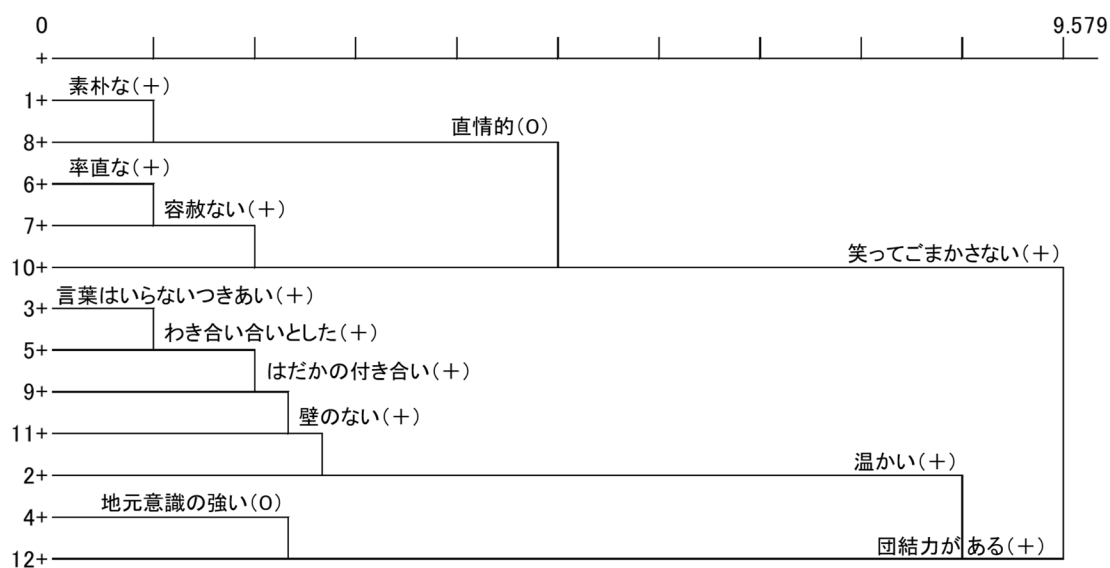


Figure 2. 女子 B「茨城県東海村出身：学部3年生」のデンドログラム
(左の番号は項目の重要順位、上部の数値は距離を示す)

(クラスター間の比較)

1番(クラスター1)みたいな考え方で付き合いをしているから、2番(クラスター2)で出てくるような率直な付き合いとか、いちいち説明しなくても仲のよい付き合いができるんだと思います。基本的に1番も2番も3番(クラスター3)も、共通といえば共通のイメージでつながっているんだと思います。ただ2番と3番の場合、2番みたいに誰に対しても受け入れるという態度を見せているんだけど、信州人とか、地域とか、自分たちの

地域に拘わっているのが見えてくる。地元びいきというのを強く感じます。

(全体としては)一言でいうなら、そうですね、うーん……。やっぱり率直ということなんでしょうか？ 全体的に暖かイメージということで統一されていると思います。

(出身地との比較)

(信州人には)外の人を受け入れるという姿勢がある。茨城の人は外の人を受け入れたがらない。信州も地元意識は強いが、受け入れる姿勢がまったくないということはない。茨城との差を考えるから、受け入れているような気がします。(被験者の)おじいちゃんはいまだに「うちは佐竹(秋田に転封された佐竹藩の系列)だから」といっている。出身地の東海村では原子力発電の研究者と地元の人が教育問題などで意見が分かれているし、県南部に急成長したつくば市や筑波大学は異質なものとみなされている。

<被験者 B についての総合的解釈>

クラスター1の項目をみると、深い付き合いになると「容赦ない」「笑ってごまかさない」という特徴があるが、これらは「率直な」と同様な意味合いであり、「素朴な」感情や意見を直情的に示す傾向と結びついている。しかし被験者 B にとっては、外の人に対して閉鎖的な出身地の人にくらべて、受容的であると感じ、肯定的な印象を持っている。<外の人への率直で深い付き合い>のクラスターであるとみなすことができよう。

クラスター2は、外部の者に対しても「壁のない」「裸の付き合い」ができ、「言葉はいらないつき合い」で「わき合い合いとした」「温かい」集団的雰囲気を感じられている。<壁のない裸の温かい付き合い>を現すといえよう。

クラスター3は、外部に対して開放的ではあるが、根底には厳とした区別があり、「地元意識の強い」集団で「団結力がある」ことを示している。<地元意識による団結>のクラスターであるといえよう。

被験者 B の結果は、外の者への閉鎖性の強い出身地との比較によって、開放的で温かい信州人の人間関係のイメージが形成されていることを示唆するものである。

被験者 C の事例 被験者 C は、愛知県長久手町出身の女子。学部2年生で、入学以来1年9カ月を松本市で過ごしている。

クラスター分析は、Figure 3 のようになった。重要順位の高い方から3分の1まであげると、①地域結束力が強い、②中信と北信は仲が悪い、③保守的、の3項目であった。人間関係は地元中心的で、地域間の対立が強く保守的であると感じられていることを示している。全項目の好悪イメージをみると、プラスとどちらともいえない(0)がそれぞれ2つ、マイナスが5つで、いくぶんか否定的に受けとめられていることを示す。

<被験者 C によるクラスターの解釈>

クラスター1は「地域結束力が強い」～「ねちねちしている」までの6項目：このクラスターによって連想されたイメージや解釈は、「なんか、なんだろ？ 自分の住んでいるところに誇りを持っているから、他の地域とか仲間は劣っていると考えている。なんだろ？ 他人のプライバシーを干渉したがる感じかしら？ 自分の居場所を確保したい人が

多いのかなあ？ 同意を求めたがる。うーん、……。現状に満足している人が多くて変えていこうとか、他のグループと交流しようとか、積極的に参加しない。それぐらいだと思う。」と回答された。

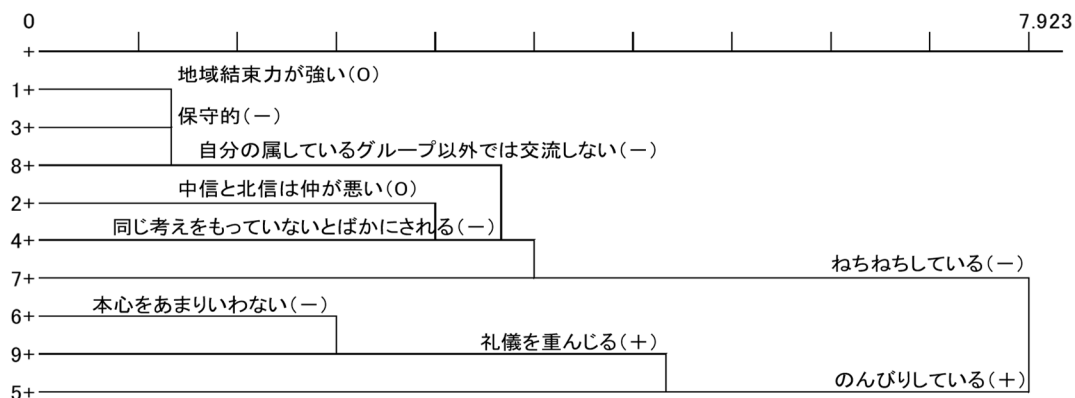


Figure 3. 女子 C 「愛知県長久手市出身：学部 2 年生」のデンドログラム

(左の番号は項目の重要順位、上部の数値は距離を示す)

クラスター 2 は「本心をあまりいわない」～「のんびりしている」までの 3 項目：「昔ながらの風習に従っている。で、……。うーん、……。うーん、……。形式に沿った生活をしたがる。……。うーん、……。他の人と違うと思われたくないから、みんなと同じ行動と発言をする。時間をあまり気にしない。……。かな？ うーん、……。あまり共通点がない気がするけど、……。『今のままずっと続けばいいなあー』というイメージ、かな？ 昔の奥ゆかしい日本人の性格がまだ存在している。それだけです。」となった。

(クラスター間の比較)

上 (クラスター1) は、狭い範囲の地域の、住んでいることが (に) 影響されていて、下 (クラスター2) のグループは、昔ながらの、他の地域なら田舎ならありそうです。共通しているのは、都会と正反対で、あまり急いだり時間に縛られていない。視野が広くない。と、……。自分と、自分に合わない嫌な状況になっても、原因を他人に押しつけてしまう。下は、それを本人にあまりいわない。「その人が悪い」「そこが悪い」というのは、その人が (や) そのグループにいわずに他の人にいう。上は保守的かな？ 下は古風な感じ、奥ゆかしいかな？ それぐらいです。

(補足質問)

ねちねちしている：一つのことを、忘れずに、しつこく覚えている。他には陰湿、怖い。……。それぐらい。

本心をあまりいわない：じ、何、自分に自信がないとプライベートを重んじる。大事にする。対立したくない。恥をかきたくない。仲良くしていきたい。それぐらいです。

のんびりしている：田舎。広い場所に住んでいるから時間を気にしない。おおらか。のびのびしている。それぐらいです。

(出身地との比較と地元の人との交流)

住んでいる場所は(出身地)は、信州より都会。信州の人とは、バイト先、サークル、あとはクラスの友達くらい。(信州の人間関係のイメージの形成には)バイト先の影響が大きいかも知れない。お客さんとか。前に接客(お寿司屋さん)で、注文を取ったりしていた。

住んでいるの(出身地)は、引っ越してきた人が多く、私も引っ越してきた。名古屋に住めないから。衛星都市かな。

<被験者 C についての総合的解釈>

クラスター1は、「中信と北信は仲が悪い」し、「地域結束力も強い」し、「保守的」で、「自分の属しているグループ以外では交流しない」で、「同じ考えをもっていないとばかにされる」傾向があり、「ねちねちしている」と感じられていること示している。名古屋での都市生活を体験している被験者にとっては、<地域主義の保守的な人間関係>のクラスターとしてイメージされていると解釈できる。

クラスター2は、田舎でおおらかであり、「のんびりしている」し、「礼儀を重んじる」風潮があり、「本心をあまりいわない」という項目からなっており、伝統的な地方の特徴を示す<和と礼儀の尊重>のクラスターであると考えられる。

被験者 C のケースは、都市生活体験者からみた信州人の人間関係のイメージを示唆するものであるといえよう。

被験者 D の事例 被験者 D は、静岡県富士市出身の男子の学部2年生で、入学以来の1年9カ月を松本で過ごしている。

クラスター分析の結果は、Figure 4 のようになった。連想項目のほぼ3分の1である重要順位2位までをあげると、いずれもマイナスイメージの、①閉鎖的、②頑固、となった。全項目をみると、マイナスが3、プラスが2、どちらともいえない(0)が2項目である。プラスとマイナスのイメージが葛藤または均衡していることを示唆する。

<被験者 D によるクラスターの解釈>

クラスター1は「閉鎖的」～「見栄っぱり」までの4項目：「やっぱり付き合いにくいというか、よそ者を受け付けられないというか。その中で人間関係はがっちりしているというか。えーと、村という感じですかね。昔の村組織というイメージがあるんですけど。悪いイメージですか。他は見栄っぱっている、なんか香典とかなんか高くて、農村部に生活改善運動の看板があるが、葬式とか結婚式とかが派手で、そういうところから『見栄っぱり』というのが浮かんだんですけど。今までの習慣を変えないというか、新しいものを受け付けられないのから選んだんですけど。信州ということで、山奥で、とくに閉ざされた空間というか、そういうイメージなんですけど。」となった。

クラスター2は「おおらか」～「のんびり」までの3項目：このクラスターについては、「これは、まあ田舎というか、そういう所で、信州は田舎と思っちゃうんですけど、都会のように時間に縛られていないとか、そういうイメージなんですけど。まあこれはさっきのやつ（クラスター1）と矛盾するというか、反対で、あたたかで親切にしてくれるという感じがあるんですけど。そうですね。……。まあ悪い人はいないとか、なんとか、細かいことを気にしていないとか。うーん、あとは……。それぐらいですか、ね……。」と回答された。

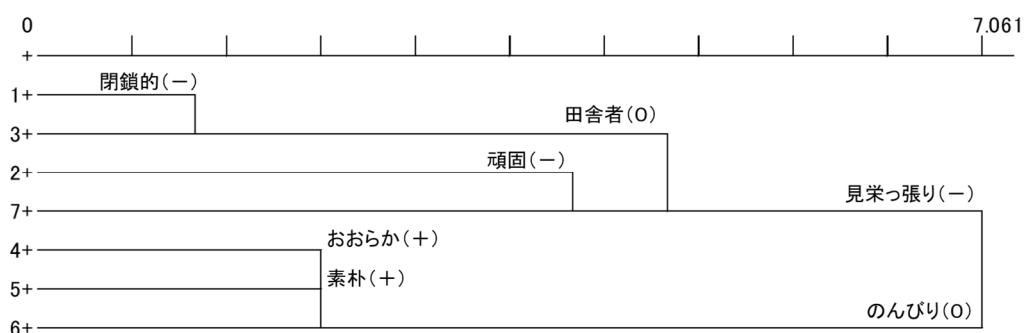


Figure 4. 男子 D 「静岡県富士市出身：学部2年生」のデンドログラム
(左の番号は項目の重要順位、上部の数値は距離を示す)

(クラスター間の比較)

えーと、そうですね。「田舎者」というのは、「素朴」とか「のんびり」と一緒かなという感じがしますし、えー、あと、そうですね……。この「おおらか」というのが、細かいことを気にしないことが、やさしいとか親切とか、いろいろもてなしてくれる、それと「見栄っ張り」が結びついているんじゃないかと。下（クラスター2）の方がいいイメージで考えると、よそ者が来るとあたたかく迎えてくれるが、本当には受け入れないで、住み着くと拒否される上（クラスター1）のイメージで、それが悪いものとして結びついている。

(出身地との比較)

静岡の富士市出身。(人口は)22万です。富士も田舎といえば田舎だが、東海地方の静岡(市)と沼津は1時間で行けるし、東京も近く、横に広がり、流れがある。交通の便もいいし。だから同じ田舎にしても、閉鎖的じゃない。矛盾するけど、そんなイメージがある。他はたぶん、うち(家)があったところが、いま両親、父親の両親がいて、昔からここにいる。僕の両親は転勤して小学校の時に戻ってきたので、近所の人とあまり交流がなく、そんなごちゃ混ぜになった感情があると思うんですけど。だから田舎の行事、町と祭りとかは、富士

とかでもやっていたんですけど。田舎だなと感じ、やっぱりやる気がしないんですけど。信州人は「理屈っぽい」とか「議論好き」とか人から聞いたことがあったんですけど、そうイメージはしなかった。村でまともまっている。南北で仲が悪いというのは聞いたんですけど。

<被験者 D についての総合的解釈>

クラスター 1 は、項目の「閉鎖的」「田舎者」「頑固」「見栄っ張り」と項目単独でのイメージがマイナス 3、どちらともいえない (0) が 1 であることが村社会を直裁に示すように、<慣習や儀礼を墨守する>としてマイナスにイメージされたクラスターである。これは出身地富士市とだけでなく、父親の転勤にともない都市生活を体験していることによる比較に基づくと考えられる。

クラスター 2 は、連想項目が「おおらか」「素朴」「のんびり」で、プラスが 2、どちらともいえない (0) が 1 項目であることから、田舎のもつ肯定的なイメージを代表するものである。<おおらかで包括的な人間関係>のクラスターであるといえよう。

被験者 D にとっては、被験者 C とおなじく都市生活を体験したことにより、信州人の人間関係の独自性は感じておらず、伝統的な村社会の否定と肯定の 2 側面がイメージされているといえよう。

被験者 E の事例 被験者 E は、先に引用した祖父江の記述での「肥後の大ちょうちん」に関連する、熊本県熊本市出身の学部 4 年生男子である。大学入学以来の 3 年 9 カ月を松本で過ごしている。

クラスター分析の結果は、Figure 5 に示されている。連想項目のほぼ 3 分の 1 にあたる重要順位第 2 位までをみると、①閉鎖的、②さわらぬ神にたたりなし、となった。全項目の単独でのイメージをみると、マイナス 1 プラス 2 で、残りの 4 項目はどちらともいえない (0) である。否定でもなく、肯定でもなく、距離をいて眺めているのではないかと推測される。

<被験者 E によるクラスターの解釈>

クラスター1は「閉鎖的」～「相互不干渉」までの 4 項目：クラスターから連想されたり解釈される内容は少なく、「これは何か、長野県が孤立しているというので思い浮かんだイメージだと思います。孤立しているから保守的な交際が多いと思いました。それくらいです。陸の孤島が長野県ですか。」と回答された。

クラスター2は「長いものにはまかれろ」～「浅い」までの 3 項目：クラスター2の方は、「孤立しているので、情報がなかなか入ってこないのに入ってきた情報を重視する傾向があると思います。……………、なんか……………、真似しやすくさめやすいようなはやり廃りが、そんなにコロコロ変わらないような所だと思います。新しいものにはすぐ飛びつくが、はやり廃りはないというイメージ。スパンが長い。」となった。

(クラスター間の比較)

上 (クラスター1) にあげたように、孤立しているから情報が入ってこないという風に、上から下 (クラスター2) に関係が繋がっていると思う。上が原因で、下が結果みたいな

感じます。上のような原因があるので、下のような大きな権力に従うような傾向があると思います。そのくらいです。

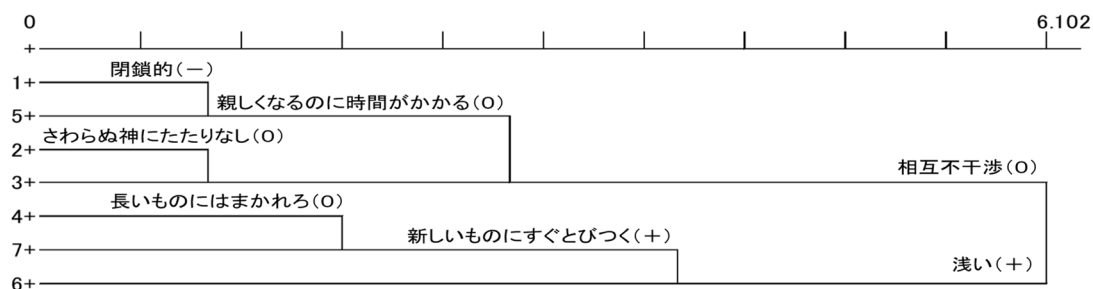


Figure 5. 男子 E「熊本県熊本市出身：学部 4 年生」のデンドログラム
(左の番号は項目の重要順位、上部の数値は距離を示す)

(補足質問)

さわらぬ神にたたりなし：よく死体とかが捨てられるので（関西で愛犬家 5 人が次々と殺害され、死体が塩尻に埋められ遺棄された事件のこと）、きっと他の土地の人が長野県のことを、そんなに騒ぎ立てるような人たちでない、そんなにうわさが広がらない所にする人たちだというイメージがある。なんか、エイズが広まったにも拘わらず、長い間対策が施されてこなかった所だと思います。

長いものにはまかれろ：長野（県）から（羽田）首相が出たときも、（熊本から細川首相が出たときにくらべて）そんなに県全体で盛り上がっているわけではなかったので、首相は誰でもいいんだと思いました。

(出身地との比較と地元の人との交流)

熊本市は人口 60 万人くらい。熊本とくらべて、熊本の方が郷土に執着する意識が強いと思いました。長野は近くに都会（大都市圏）があるので、そちらの方に意識が向いているのだと思いました。よく長野の人はサービス精神がないと聞きますが、長野がそんなにひどい訳じゃないと思いました。（ここで実験者（筆者）の方から「信濃の腰ちょうちん、肥後の大ちょうちん」の話をしたところ）、「肥後もっこす」という言い伝えがあるように、（肥後の人は）一人一人が頑固で、へそ曲がり、自分を主張していくところがある、と回答された。

<被験者 E についての総合的解釈>

クラスター1 は、地元の人々が「閉鎖的」で孤立しており、「親しくなるのに時間がかかる」し、保守的で「さわらぬ神にたたりなし」との雰囲気があり、「相互不干渉」であるとの内容から構成されている。<保守的な閉鎖集団>として感じられていることを示すクラ

スターであるといえよう。

クラスター2は、「新しいものにすぐとびつく」がそれらは「浅い」ものであり、はやり廢りがなく「長いものにはまかれろ」と体制に順応する傾向を感じていることを示唆するものである。＜体制順応の風土＞を意味すると解釈できるであろう。

被験者Eにとっては、＜保守的な閉鎖集団＞での表現に代表されるようにあることが、＜体制順応の風土＞の原因であるとも考えられている。また被験者1名の結果から安易に推論することはできないが、「肥後もっこす」の表現に代表されるような自己主張の強い熊本出身者からみれば信濃の人々は「議論好き」であるとか、「自己主張が強い」とは感じられないことを示唆している。この結果は、大同団結する「大ちょうちん」的傾向が、「自己主張の強さ（注：ここでは「弱さ」を意味する）」とかとは直接には関係しないことを推論させるものである。

II. 県内出身者の事例

ここでは、中信地区出身者2名、南信地区の出身者1名、北信地区の出身者1名の事例を取り上げる。

被験者Fの事例 被験者Fは、中信地区松本市出身の学部3年生の女子で、県外での生活経験はない。

クラスター分析の結果は、Figure 6 に示されている。連想項目の3分の1にあたる重要順位5位までをピックアップすると、①排他的、②仲間意識が強い、③“みんな同じ”が好き、④目立つ人を嫌う、⑤グループを作りたがる、となっている。いずれもマイナスイメージであるこれらの項目からは、排他的で集団志向が強く、斉一性の強い同質集団の形成を好む傾向を感じていることが窺える。全項目のプラス・マイナスイメージをみると、プラスが4、マイナスが11で、総合的にはマイナスイメージがかなり強いといえる。

<被験者Fによるクラスターの解釈>

クラスター1は「排他的」～「クール」までの10項目：「これは最初にある『排他的』が全部にあって、仲間から出ちゃうとかそれ（仲間）以外の人をすごく嫌う。で、仲間の中ですごくあんまり争いごとが起こらないように、みんな同じとか、あっても『なあなあ』ですませちゃう、そんな感じです。もし自分がその仲間に入ったら、自分自身もみんなと同じように、目立たないようにしようと思っている。これ（このクラスター）をみて感じたことなんですが、信州の人たちは、信州人から有名な人が出ないといわれているが、才能ある人が目立つこと、自分自身が目立つことを嫌っているから、才能ある人も表に出ないと感じた。でも、あと仲間意識が強いから、そこに入ったらすごく居心地がいいと思いました。」となった。

クラスター2は、「いったんうちとけるとずっと仲良し」～「おおらか」までの5項目：こちらの方は、「仲間にはすごい親切で、みんないい関係を持っているんだと思いました。こういう町内とか隣組とか、お葬式とかそういうとき、みんながいろいろ手伝ってくれるか

ら、そういうのこういうところ（クラスター2の内容）からきていると思いました。上（クラスター1）のでもいったのですが、仲間の中では親切だったり、すごく仲良くなっているの、それは居心地がいいと思います。他にはありません。」となった。

（クラスター間の比較）

上（クラスター1）は仲間意識が強いということの悪い点、で下（クラスター2）はその仲間意識が強いことのよい点だと思いました。

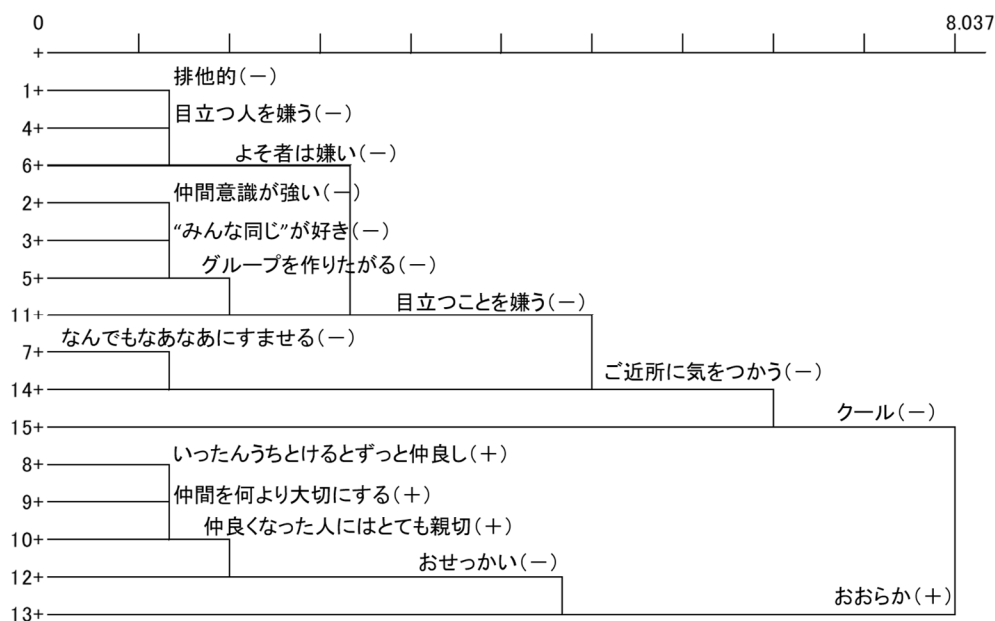


Figure 6 女子 F「県内松本市（中信）出身：学部3年生」のデンドログラム
（左の番号は項目の重要順位、上部の数値は距離を示す）

（補足質問）

目立つ人を嫌う：才能があったり、みんながちょっと注目するような人は嫌われるし、現に学校とか高校の頃とかでも嫌われたので、そういうことが浮かんできます。

目立つことを嫌う：これは仲間に入っている場合、そこから突出して目立ったりしないようにしている、というのが浮かんできました。

なんでもなあなあにすませる：何か、会議とか町内の集まりがあった場合に、何時集合とかに10分とか20分遅れて来ても、「まあいいかあ」ということですませちゃう。意見の対立があっても、「まあまあ」とわからなくしちゃう感じがありました。

クール：これは仲間以外のよそ者の人にはけっこう冷たく接することがあるというのが浮かんできました。

おおらか：これはあまり今までのとはあんまり関係ないですけど、田舎だからおおらかで人間関係もぎすぎすしていないと思いました。

（実験終了後での雑談で聴取）

信州人はお互いに足を引っ張るというのはある。(出身地である中信地区と)長野(北信地区)とは仲が良くない。他の地区とは対立している。

<被験者 F についての総合的解釈>

クラスター1は、「グループを作りたがる」傾向をもち、「仲間意識が強い」し、「“みんな同じ”が好き」で、「ご近所に気をつかう」し、「目立つことを嫌う」が、「よそ者は嫌い」で「クール」で冷たい、という内容である。<排他的・同質的な集団志向>のクラスターであるといえよう。全項目がマイナスイメージであり、被験者 F にとっては「信州人の人間関係」の否定的な側面を代表している。

クラスター2は、「いったんうちとけるとずっと仲良し」で「仲間になった人にはとても親切」で「おおらか」であり、ときには「おせっかい」と感じられるほど「仲間をなにより大切にする」、という項目から成立している。「おせっかい」のみがマイナスで、「残りはずべてプラスのイメージである。<仲間集団の尊重>と命名できるクラスターであるといえよう。

被験者 F においては、「議論好き」であるとか「自己主張が強い」というイメージは浮かんでいない。仲間集団では同質性や斉一性を大事にするが、外集団に対しては排他的で対立する傾向が存在するというイメージをもっていることが明らかにされたといえよう。このことから、信州人の人間関係については、「個人」が相互独立なのではなく、「集団」間関係が相互独立であることが推測される。そして、内(仲間)集団においては、「相互互助型」であることが読みとれる。この点に関しては、1事例による知見では不十分であり、後続の事例でさらに検討することが必要である。

被験者 G の事例 被験者 G は中信地区松本市出身の学部3年生の男子で、県外での生活経験はない。

クラスター分析の結果は、Figure 7 のようになった。連想項目の3分の1にあたる重要順位4位までをピックアップすると、①あたたかい、②対立をさげようとする、③世間体を気にする、④えんりよする、となっている。これらは、信州人の人間関係が他者志向的であると受けとめられていることを窺わせる。項目単独でのイメージは、プラスが5、マイナスが7項目で、両者が葛藤または均衡状態にあることを示唆している。

<被験者 G によるクラスターの解釈>

クラスター1は「あたたかい」～「共感する」までの4項目：「これは一、……、関西系(関西出身)の人と長野県出身者を比較した場合に、『やさしい』『あたたかい』そういうようなイメージが出てきた。この部分っていうのは、肯定的な部分が固まっていると思います。」となった。

クラスター2は「対立をさげようとする」～「相手を傷つけない」までの3項目：この項目に関しては連想や解釈がほとんど出てこないで、「上(クラスター1)にくらべたらそれほど肯定的とは思わない部分で、消極的なイメージがします。……………、……………、(他には)ありません。」と回答された。

クラスター3は「えんりよする」～「世間体を気にする」までの5項目。:「上から(クラスター)の順にさらに否定的なものが集まっていると思います。これはやっぱり、一番上のグループ(クラスター1)の『相手の気持ちを考える』とか「共感する」とかの、そういうものの裏側として、『遠慮したり』『気を使ったり』『自分を抑えたり』というイメージが集まっていると思います。そんなとこですけど。」となった。

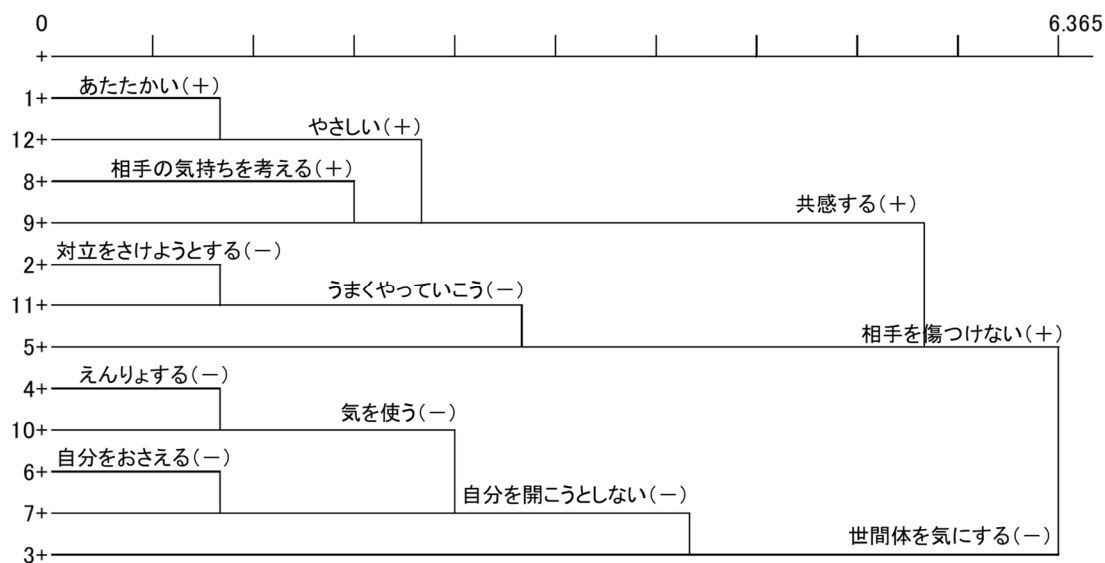


Figure 7. 男子 G 「県内松本市(中信)出身学部3年生」のデンドログラム
(左の番号は項目の重要順位、上部の数値は距離を示す)

(クラスター間の比較)

クラスター1と2について:1番のグループ(クラスター1)がいい見方ですか、いい見方をしているのに対して、2番のグループ(クラスター2)は、同じようなことをもう少し悪い言い方をしている。

クラスター1と3について:1番のグループは「あたたかい」とか「やさしい」という印象を与えるが、その反面(クラスター3におけるように)その人の中には「遠慮」とか「世間体」があって、「自分を抑えている」というのがあると思います。

クラスター2と3について:これも2番の群の「対立をさげようとする」とか「うまくやっ払いこう」とするためには、(クラスター3の)遠慮したり、「自分を抑えたり」「世間体を気にしなければいけない」ということだと思います。

<被験者 G についての総合的解釈>

クラスター1の項目をみると、「あたたかい」「やさしい」と「相手の気持ちを考える」「共感する」の4つであり、いずれも単独でのイメージがプラスである。これらは信州人の人間

関係の一般的特徴として、＜あったかい共感的関係＞をイメージしていることを示すクラスターである。

クラスター2は、「相手を傷つけない」ように「対立をさげようとする」し、「うまくやっ
ていこう」と努力する傾向を現している。プラスが1項目、マイナスが2項目である。被験
者が表明しているような、クラスター1の消極的なイメージというよりも、＜他者志向的な
対人技術＞とも呼ぶべき内容である。

クラスター3は、「世間体を気にする」ことで、「えんりょする」とか「自分をおさえる」
{自分を開こうとしない}で、「気をつかう」という、いずれもマイナスイメージで、＜自
己抑制的な対人関係＞から構成されていると考えられる。

被験者Gにおいては、あたたかく共感的な人間関係の裏面として、他者に気を遣い自己
を抑制するマイナス面が意識化されている。そして、「議論好き」であるとか「自己主張の
強さ」のイメージはまったく浮かんできていない。この結果は、被験者独自の性格や対人行
動の特徴によってもたらされた可能性がないとはいえないが、被験者Fでの考察と符合す
るものである。

被験者Hの事例 被験者Hは、南信地区下諏訪町出身の学部4年生男子で、大学受験浪
人以来4年9カ月ほど松本に通っている。県外での生活経験はない。

クラスター分析の結果は、Figure 8 のようになった。重要順位の高い方からほぼ3分の
1までをあげると、①地縁を大切にする、②先ばいを大切にする、の2項目でいずれもプラ
スイメージであった。地縁に基づく人間関係のイメージが強く、これを肯定的に受けとめて
いると思われる。全体の連想項目をみると、プラスとマイナスのいずれも3項目で、残りの
1項目がどちらともいえない(0)である。プラスとマイナスのそれぞれのイメージが均衡
あるいは葛藤状態にあることを示唆する。

＜被験者Hによるクラスターの解釈＞

クラスター1は「地縁を大切にする」～「地域が狭い」までの4項目：このクラスターが
構成された背景要因の説明（解釈）として、次のような回答があった。すなわち、「やっぱ
り盆地になっているせいじゃないですかねー。はじめ諏訪からあまり出ることがなかった
ときには気がつかなかったが、（大学受験）浪人して松本に来たり、大学に入って感じるの
が、それぞれが盆地になっていて（両手で挟むようにそれぞれの盆地の位置を示すしぐさを
して）、そのせいが大きいと思います。（どんな内容でまとまっているのかとの質問に対し
て、）やっぱ生活している地域が狭いせいもあるかも知れないが、わりと土地の中（両手輪
を作って）、小学校でも地域が決まっています、同じ所の子が友だちとなって遊んで、後にな
ってもという感じですね。友だちのいる範囲が狭いというか、住んでる場所が固まっている
というか、諏訪だったら盆地の中。諏訪盆地の中。」であった。

クラスター2は「クラスがえがない」～「長く続く」までの3項目：このクラスターでは
「小学校の頃からクラスがえがない。小・中・高。諏訪ではほとんどやってない。僕の場合
そうだった。小・中・高、同じ人がいてけっこうお互いに言い合ったりするんで、僕の友だ

ちをみて考えたんですが、わりと理屈っぽくって討論が好きで、大学に入ってもそういわれた。討論といっても大討論ではなく、野球などの軽い話を、それぞれの人がわりと好き勝手言い合うというのが多かった。そういう友だちとは、わりと関係が長く続くというのがありますし、今ではそれぞれが離れちゃっているんで頻繁に会わないが、たまに会うと、討論は大げさですが、けっこう討論めいたことをやっているんで、やっぱ理屈っぽい。それぞれが理屈っぽい。理屈好きだというのがあると思うんです。それぐらいです。」となった。

(クラスター間の比較)

下(クラスター2)の方は友人関係というか、わりとくだけけた、上(クラスター1)はわりとかっちりしたフォーマルじゃないんですが、わりときちんとした付き合いじゃないかという感じがします。上の方は個人の性質とかには関係ない部分で、下の方は個人の性質・性格にわりと大きく関わっていると思います。(他には)別にありません。

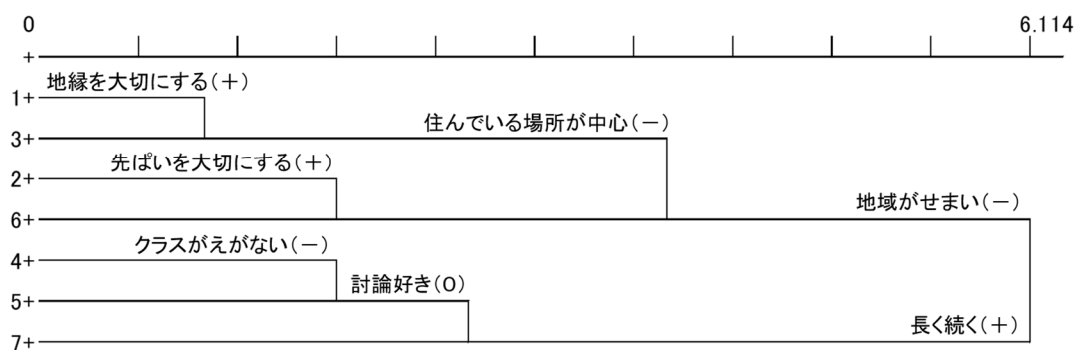


Figure 8. 男子 H 「県内下諏訪町(南信)出身:学部4年生」のデンドログラム
(左の番号は項目の重要順位、上部の数値は距離を示す)

(実験終了後の雑談での聴取)

転校生とか、わりとはじめのうちは、こちらも仲良くしなければいけないと思うが、(彼らが)どこまで中に入っていたのかと思う。転校生同士が仲が良い。地域が狭く(人の)入れ替わりがないので、(地域の住人は)はじめからあとまで仲良くしなければいけないところがある。いろいろ議論するが決まってしまうと、みんなの意見を調整するのでありふれた結論となりがちであるが、さっさとやる。

時間を、友だちと遊ぶ約束をしても、なかなか来ない。家に電話すると出ていて、何をしていたんだと聞くと、友だちと話していたということがある。わりとそれぞれが勝手なところ

ろもある。友人関係や友だちはそうでないが、社会に出て、町内会や企業では、当たり障りのないことを、同じようにお互いがやっているところがある。

北信と中南信は仲が悪い。オリンピックも南信の人は何だかと思うと思う。ほんとに決まるまで、北の方だけが騒いでいると思った。決まってしまうと、見に行きたいと思うんですけど。たしかに盆地ごとにまとまっている。盆地間の交通が不便で、お互いに妙に敵対心が昔からあり、今はそうでもないが、昔から引きずっているじゃないですかね。

諏訪（地方）が長野県で特異ということはない。人から「諏訪の在ですか？」といわれてこない。

<被験者 H についての総合的解釈>

クラスター1は、「地域が狭い」「住んでいる場所が中心」「地縁を大切にする」「先ばいを大切にする」の4項目から構成されていること、被験者自身による盆地生活の実態が報告されていることから<地縁を大切にする人間関係>のクラスターであると解釈されよう。

クラスター2は、「クラスがえがない」「長く続く」「討論好き」の3項目で。被験者による報告にあるように、諏訪近辺で存在した（する？）学校でのクラス替えがないという特異な傾向に代表されるが、人間関係が固定的で地縁による仲間意識が強い。このため仲間内ではけっこう好き勝手にものが言え、討論することが多い。そこで、<固定的な人間関係と仲間内の討論>として解釈することができよう。

ところで、県内出身者により「討論好き」という連想項目が初めて出現したが、被験者 H による限りでは、幼少期からの固定的な仲間関係の範囲内に限定されているようである。また、実社会に出てからは、斉一性への圧力が強く、同質集団としての特徴がみられることも報告されている。このことから、かつて多く観察されたものとして祖父江の論文などに記述されている、「議論好き」や「自己主張が強く」「めいめいが勝手な行動をする」傾向は、少なくとも現在では、実社会ではそれほどみられないようである。

被験者 I の事例 被験者 I は 北信地区更埴市出身の学部 4 年生の女子で、大学入学以来 3 年 9 か月を中信地区松本で過ごしている。居住は、県外出身者の多い大学の女子寮である。県外での居住経験はない。

クラスター分析の結果は、Figure 9 のようになった。連想項目のほぼ 3 分に 1 である重要順位 3 位までをあげると、①几帳面、②頑固、③議論好き、となった。全項目の単独イメージをみると、マイナスが 2、プラスが 7、どちらともいえない (0) が 1 項目である。全体としては、プラスイメージの方が強いことを示唆している。

<被験者 I によるクラスターの解釈>

クラスター1は「几帳面」～「まじめ」までの4項目：群全体についての連想や解釈は、「えーと、ひなびた寒村の、えー、言葉の少ない口数の少ない人々。老夫婦、あと、えー、うん、それぐらいです。信州の人間の、あの、根本的な性格だと思います。」となった。

クラスター2は「議論好き」～「信頼」までの6項目：「田舎だから、あのー……、それほど洗練されているわけではありませんけど、人と人が交流していて、一緒にお味噌を作る

とか、お菜（野沢菜）を洗うとかいうことから連想しました。中年のおばさんたちがお茶を飲みながら世間話をしていて、そのおばさんたちというのも手ぬぐいをかぶって、割烹着を着て、農家の人のような感じです。小さい町会とかが、最小単位として、それだけ結びつきが強いけれどもちょっとうるさいです。人に対してあまり無関心でないという感じです。それくらいです。」となった。

（クラスター間の比較）

全部共通していて、無関心とか軽いとか、そういう都会に代表されるイメージとはまったく正反対です。上（クラスター1）の方は、うーん、まあ老人とか過疎のイメージがあるんですが、下（クラスター2）の方は、中年ぐらいの生活者が生き生きと生活しているという感じです。くらべてみると、上の方が、伝統を重んじる旧家という感じなんですけど、下の方は庶民という感じがします。

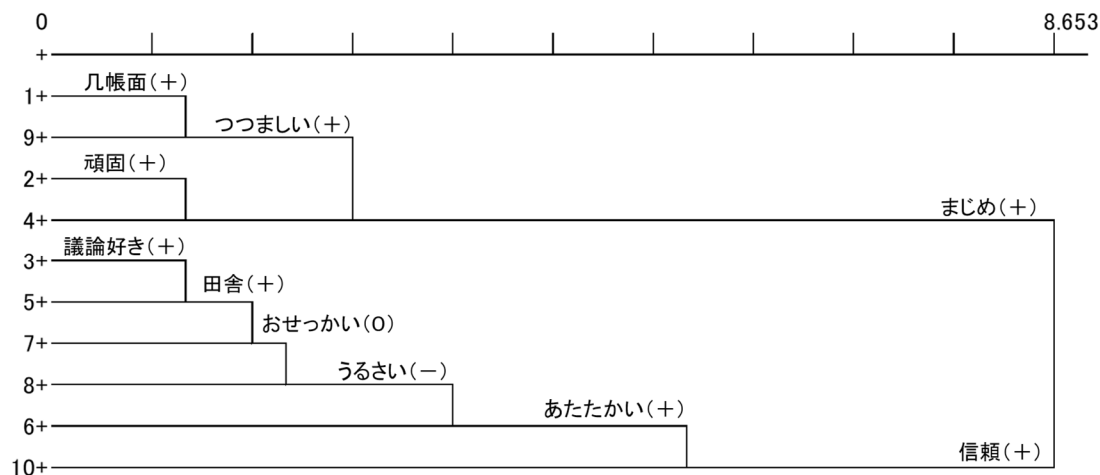


Figure 9. 女子 I 「県内更埴市（北信）出身：学部 4 年生」のデンドログラム
（左の番号は重要順位、上部の数値は距離を示す）

（実験終了後の雑談での聴取）

更埴市は松本より人口が少ない。6万人くらいだったような気がします。住んでいるところ更埴市、のんびりしている感じです。農村ではないので、それほど人間関係はわずらわしくないんですが、えー、田舎独特のあたたかさがまだ残っているんで、住みやすいです。北信としては、中心の長野市のベットタウンで、買い物も長野市に流れるので、更埴はほんとに住んでいるだけという感じもあります。北信の人は非常に保守的だといわれています。他の中信、南信にくらべては、古いものが多く、また他人に対してもやや無関心な所がある気がします。中信の人はあの、個性が強くて我も強いので、ぶつかりあいが多い感じがします。

あと、北信の人は中信の人に対してあまりいい印象を懐いていません。南信は、長野県というイメージがあまりないんですけど、何か、すごくこう……、あたたかくて、のんびりしていて、楽観的で、北信とはまったく違う気がします。東信は印象が薄いのでわかりません。

長野県人が自己主張が強いということはない。ただ郷土心が強く、信濃の歌を歌うことが多く、誇りを持っていて、郷土についてなら団結する。もし自己主張が強いとされるのなら、ものすごく村とか郡の数が多いので、一つに統合しようとしないうし、望んでいないし、小さな村々が、自分たちという自己主張を強くもっているからだと思います。だからいろんな村が集まって、ふるさと自慢、郷土の特産物も、自分たちの村にはこういう産物がある、こんな活動をしていると、競争しているのに現れているんじゃないかと思います。無意識のうちに、北信、南信、中信という対立を感じている。それぞれ別れている人の感じは違うと思っ

ているところがあります。長野はオリンピック、南信は人形劇で競争している。長野の人は中信が嫌い、とくに松本の人は嫌い。気が強いし、ずるいし、見栄っ張り、お金が高ければいいと思っていてなじめない。

(東信の) 上田は近くて、あたたかいんです。更埴が雪でも晴れている。長野県で一番住みやすいといわれている。人間関係より、気候。軽井沢は長野県にあっても、独特の路線で、観光や文化が発達している。あえて長野県にあっても、長野県ということをあえて主張しないところがある。他の所からも長野県と思われているところが少ない。佐久はよくわからない。

長野県人は、人に甘えるのが下手だ。心のうちに秘めてしまう。媚びを売るのは恥ずかしいというか、そういう美学があるんじゃないかと思う。けっこう長野県の中には、「やさしさの中に厳しさがある」というモットーが教えられたように思う。道徳の授業も多くさか

<被験者 I についての総合的解釈>

クラスター1は、「几帳面」「つつましい」「まじめ」「頑固」が老夫婦や伝統的な旧家の象徴イメージとむすびついていることが暗示するように、伝統的な信州の人間関係の特徴を示唆するものであると考えられる。<几帳面で堅実な伝統>のクラスターであるといえよう。

クラスター2は、「議論好き」「田舎」「おせっかい」「うるさい」「あたたかい」「信頼」で、庶民である中年のおばさんたちの実生活からイメージされていたことが象徴するように、現実の仲間集団での人間関係のあり方を示すものであると考えられる。<言いたいことのできる信頼関係>を意味する群であると解釈することができよう。

ところで、「議論好き」が、伝統的な人間関係ではなく、仲間集団での実生活と結びついているのは、被験者 H のケースと通じるものである。また、被験者 H と I との実験後の聴取の中でも明らかにされたように、「自己主張の強さ」は個人としてではなく、地域間の抗争や対立関係の中で顕在化するものであると考えられる。

総合的考察

県外出身者 5 名と県内出身者 4 名を対象として、「信州人の人間関係」のイメージ構造を個人別に詳細に検討してきたが、各事例には共通点と差異点のいずれもがみられた。

まず多くの被験者に共通するものとしては、信州人の人間関係は県外出身者やよそ者にあたたかくやさしいものであるが、それらは表面的な付き合いの段階にとどまるものあることがイメージされていた。そして内面深くが露呈する親密な付き合いにおいては、地元意識が強く、外部の者に対して、閉鎖性や排他性が顕在化してくる。そして、仲間集団（内集団）の内部では、相互に気を遣い、融和を第一とし、相互互助的な関係がみられる。また、県内出身者 4 名のうち 3 名からの聴取により、盆地ごとの生活地域が限定されてきた歴史的経緯によると考えられる、地域間の競争や対立が強く、無意識のうちに敵対心を生じるまでに、現代の若者においても潜在的に強く存在していることが窺われた。自己の出身地域にこだわる県内出身者には、強力な地域（人間関係）ステレオタイプが残存しているといえよう。

他方の被験者による違いは、県外者の事例で顕著であった。被験者 A においては、出身地山梨県韮崎市と類似したイメージをもっていた。被験者 B においては、長野県よりもさらに強い外部の者への排他性や閉鎖性が存在する出身地茨城県東海村との対比を行い、相対的に、信州人の人間関係をあたたかく開放的なものとして感じていた。これらに対して、愛知県長久手町出身の被験者 C と静岡県富士市出身であった被験者 D とでは、それぞれに大都市圏での生活体験をもっていることから、伝統的な田舎の閉鎖性とあたたかさの 2 側面がイメージされていた。これらは、人々が出身地での人間関係のあり方を認知的な枠組みの係留点として、これと比較しながら他地域出身者の具体的な対人行動を観察し、イメージを形成していることを示唆するものである。この点については県内出身者の場合も同じであり、被験者の報告の中にも、例えば「関西系の人と長野県出身者を比較した場合に（被験者 G）」というように散見する。

また祖父江が「薩摩（あるいは肥後）の大ちょうちん、信濃の腰ちょうちん」と形容した地域の一つである熊本県熊本市出身者 E によっては、祖父江とは逆に、長野県が「保守的な閉鎖集団」と「体制順応の風土」とであるとのイメージ構造がみられた。さらに熊本にも「ひごもっこす」と呼ばれる強烈な自己主張の存在することから、「大ちょうちん」的傾向や「腰ちょうちん」的傾向が、自己主張の強さとは直接には関係しないことが推論された。これらの知見は、ただ一人の被験者 E の特有性によって歪められたものであるという可能性を否定することはできないが、祖父江の見解に疑問を投げかけるものである。さらに「討論好き」「議論好き」が連想されたのは、県内の南信出身者と北信出身者各 1 名のみであり、いずれも仲間集団での行動特徴が連想されたものである。「自己主張の強さ」については、被験者 C において「同じ考えをもっていないとばかにされる」というのがあるが、これは「地域中

心主義の保守的な人間関係のクラスターに含まれるものであり、個人としてというよりも、集団的な斉一化への圧力と解釈できるものである。個人としては、逆に、自己抑制と仲間集団への同調を意味する項目の連想の方が圧倒的に多いのである。被験者 F の事例での考察部分でも記述したように、信州人の人間関係においては、「個人」が相互独立なのではなく、「集団」が相互独立なのである。内集団ではわが国の一般的特徴とされる相互互助型であり、地域間の対立から生じる外集団とは相互独立であり、競争的關係が強い。このことは、南信地区出身者 H と北信地区出身者 I の実験後の詳細な雑談報告からも、推論されるところである。こうした特徴が「信州人の人間関係」の現状であるということができよう。これらの変化が、高速交通網の発達や地方的特徴の減衰といった現実の社会状況の変化からもたらされたのか否かについては、本研究の結果からは不明である。しかしながら、現時点では、たとえ大量データの収集による相関分析を用いたとしても論理的推論に過ぎず、因果関係までは分析できないであろう。

それでは、本論文の冒頭部部で取り上げた祖父江の記述との違いを、どのように解釈することができるのであろうか。

まずもっても平凡な解釈は、(1)かつては「腰ちょうちん」的傾向は存在したが、現在では「自己主張的行動」が脆弱化したという見解である。

次には、(2) もともと個々人の中には「腰ちょうちん」的傾向は存在しておらず、集団間ないしは地域間対立と論争がそうした傾向の存在を推測させたとの見解である。

上記のいずれが妥当するかは、過去の調査データがあればそれらを分析することで、また現時点でも中年期よりも年齢の高いものを被験者として比較検討することで、ある程度は明らかにされることになるだろう。どちらの分析を試みるにしても、地域間の差異を相対的に比較することのできる、現実には信州人と交流をもったことのある他府県出身者かあるいは県外者との交流経験をもつ長野県人を対象として、偏りのない分析を試みる必要があるであろう。

要 約

祖父江（1980）の研究に代表されるように、信州人の人間関係のあり方は極めて特異なものとして注目されてきた。全国的には「相互依存型」「相互互助型」の2つがみられるのに対して、長野県人に関しては「相互独立型」であるというのである。本研究では、上述のような傾向が、高速交通網が発達し、地方性が減衰しつつある現在でも存在するか否かを見当することを目的とした。

ところで、われわれは、自身や他人の人間関係のあり方、人間関係の地方性について日常的に意識化することはほとんどない。そこで、内藤が開発した個人別態度構造の分析技法（PAC分析）を用いて、県外出身者5名と県内出身者4名を対象として、「信州人の人間関係」の個人別イメージ構造を詳細に分析することを試みた。

結果は、信州人の人間関係は、県外出身者やよそ者に対してもあたたかく、やさしいものであるが、それは表面的な付き合いの段階においてのみ当てはまるものであった。そして内面深くが露呈する親密な付き合いにおいては、地元意識が強く、外部の者には閉鎖的で排他的な傾向が顕在化していた。そして、仲間集団では、相互に気を遣い、融和を第一とし、相互互助的な関係にあることを示すイメージ構造がみられた。

また、被験者間の違いは県外出身者に顕著であったが、県内外を問わず、それぞれの出身地での人間関係あり方を認知的枠組みや係留点として、信州人の人間関係をイメージしていた。

最後に祖父江の記述との違いについて検討され、信州人の人間関係においては、「個人」が相互独立なのではなく、「集団」が相互独立であること、内集団においてはわが国での一般的特徴とされる「相互互助型」であることが明らかにされた。ついで、このような現状が生じた理由や祖父江の見解への疑問点について、また今後の研究課題について考察された。

引用文献

- 内藤哲雄 1993a 個人別態度構造の分析について 人文科学論集(信州大学人文学部), 27, 43-69.
- 内藤哲雄 1993 b 学級風土の事例記述的クラスター分析 実験社会心理学研究, 33, 2, 111-121.
- 内藤哲雄 1994a 内陸地域「信州」のイメージの個人別構造分析 信州大学人文学部特定研究班 内陸地域文化の人文科学的研究1 (特定研究中間報告書), 27-47.
- 内藤哲雄 1994b 性の欲求と行動の個人別態度構造分析 実験社会心理学研究, 34, 2, 129-140.
- 祖父江孝男 1980 人間関係の地方性 南 博編 日本人の人間関係事典 III日本の集団と人間関係(11) 講談社, 301-312.